二〇二三年度

入学試験（一次B）問題

国語

・答えはすべて解答用紙に書きなさい。
・ぬき出し問題や記述問題では、句読点や記号も一字と数えること。

横須賀学院中学校

一

次の――部について、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

1　磁針が北を指す。
2　電車の運賃を見直す。
3　有名な刀剣を見る。
4　海辺の景色を楽しむ。
5　ニュウネンに準備をする。
6　チュウヤを問わずのめりこむ。
7　シャソウから富士山をながめる。
8　湖に山のすがたがウツる。

二

次の熟語について、後の問いに答えなさい。

1　縮小　　2　頭痛　　3　青空　　4　開幕

(1)　1～4の熟語と組み立てが同じものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、骨折　　イ、作文　　ウ、創造　　エ、急病

(2)　1～4の熟語の構成について、ふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、上の字が下の字を修飾（しゅうしょく）している熟語。
イ、主語と述語の関係の熟語。
ウ、似た意味の字を重ねた熟語。
エ、下の字が上の字の目的語になっている熟語。

三　次の語句の対義語になるように、（　）にふさわしい漢字一字をそれぞれ答えなさい。

1　病気 ― （　）康
2　生産 ― （　）費
3　集中 ― 分（　）
4　海洋 ― 大（　）

四 次の先生と生徒の会話文を読んで、後の問いに答えなさい。

生徒A…この間、九州に台風が上陸して大雨になったね。

生徒B…最近は毎年、[1]七月に大雨で災害が起きている気がするよ。

先　生…二〇一七年から二〇二一年は、毎年七月上旬に、死者の出る水害や土砂災害が起きました。この時期、五年間で四〇〇人以上が犠牲になりました。

生徒A…七月には大雨になりやすい理由があるのですか？

先　生…例年は梅雨後半や梅雨末期と呼ばれるこの時期は、大雨の条件がそろいます。七月にかけて日本列島上空の大気が不安定になり、南や西の海から大量の水蒸気が陸地に流れ込み始めるからです。昔から豪雨災害がよく起きる時期なのです。

生徒B…（　2　）

先　生…そうですね。その要因として「線状降水帯」がよく知られています。一つでもゲリラ豪雨の原因になる積乱雲が次々に連なる現象で、同じ場所に何時間も大雨が続きます。去年まで七月上旬に五年連続で発生していて、今年も七月五日に高知県で確認されています。

生徒A…（　3　）

先　生…七月の大雨は実際に増えています。気象庁気象研究所が「三時間に一三〇ミリ以上」の集中豪雨を数えると、一昨年までの約半世紀に、七月の豪雨の回数は三・八倍になっていました。

生徒B…地球温暖化のせいですか？

先　生…年間で見ても、集中豪雨の回数は増えました。温暖化が影響しているのかもしれません。線状降水帯の発生と温暖化の関係についても、研究は始まっています。

生徒A…今年は早く梅雨明けとされた地域もありますね。

先　生…（　4　）例年より早く活発な梅雨前線が北上し、梅雨がないといわれてきた北海道で大雨が続いています。昨年は八月に梅雨期のように前線が停滞して異例の長雨になりました。積乱雲や線状降水帯は予報が難しく、梅雨の後も突然発生することがあります。最新の気象や災害の情報を自分で調べて注意することが大事です。

（参考　『朝日新聞』二〇二二年七月十二日朝刊）

問一　――1「七月に大雨で災害が起きている」とありますが、その理由が具体的に書かれている一文をぬき出し、最初の五字を答えなさい。

問二　（　2　）、（　3　）にあてはまる生徒の言葉として最もふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい（同じ記号を二回使ってはいけません）。

ア、それにしても最近は豪雨が増えていませんか？

イ、台風による豪雨災害は九月の方が多いのではないですか？

ウ、ということは線状降水帯のせいですか？

エ、大雨が長い時間続くこともありますね。

オ、例年は九月も大雨が多いですよね。

問三　（　4　）にあてはまる最もふさわしい一文を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、寝耳に水です。

イ、油断は禁物です。

ウ、百聞は一見にしかずです。

エ、備えあればうれいなしです。

五 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

文章①

学校ではこう教わったと思います。

人類は長い年月、狩猟採集によって、つまり野生の動植物を集めて採って、捕まえて、食を得ていた。その後、今から約一万年前に農耕と牧畜を開始した。つまり人間が自然に働きかけ、種子を植えて作物を栽培し、飼い慣らした家畜を育てて、食料を生産するようになった。人びとは村をつくって定住するようになり、農耕と牧畜によって食料を増産できるようになったことから、王や貴族、神官、商人、職人など自らは食料を生産しない人たちも支えることができるようになり、やがて文明が起こり、都市、そして国家が成立した。このように農耕と牧畜によって人類は発展することができた、などなど。

[1]「神話」のように信じられてきたこの歴史観に、疑問を打ち出した説があります。英語では二〇〇四年と二〇一七年にAgainst The Grainという同じタイトルの本が違う著者によって出版されました。[2]後者は日本語にも翻訳され『反穀物の人類史』というタイトルで出版されています。

これらの本は穀物に逆らって、つまり、農耕を始めたことによって人類は文明を発展させ前進してきたという通説に逆らって、問い直しています。むしろ穀物が選ばれたのは、支配する側にとって都合が良かったからではないか。さらには、人が集まり限られた種類の作物と家畜を集めて栽培・飼育することで、寄生虫や病原体のa温床となり、人間も作物も家畜も逆に不健康になったのではないか、と。

考えてみてください。この地球上には人間が食べられる植物は多種多様に存在するのに、[3]なぜ、小麦、大麦、コメ、トウモロコシという四つの作物が「主食」と呼ばれ、世界のカロリー消費の過半数を占めるほどになったのでしょうか。多様性に富む方が自然にも人にも健康のためには望ましいのに。作物も動物も人間も、単一栽培や家畜化や都市化によって「密」になることで、病原体の繁殖と変異を許してしまうのに。

胃袋を満たすという目的のためには、穀物よりイモの方が、早く楽に大きなデンプンの塊を育てることができるでしょう。食べるときも、洗って焼くか蒸すかすれば食べられるので[4]簡単です。一方、穀物は、もっと長い月日をかけて小さな種子を栽培し、脱穀して穂から粒を外して固い殻やゴミや異物を取り除いて、コメは水に浸し

て炊飯したり、麦は製粉して発酵させて焼いたりと、食べるのにも手間がかかります。

でも、固い殻に包まれた軽い種子である穀物の方が、腐らせることなく長期間保存でき、大量の穀物を溜め込むことや、ずっと遠くから輸送して集めることができました。つまり、穀物は富の蓄積に都合が良かったのです。

5 『反穀物の人類史』はさらに、国家が人々に課税して支配するために、穀物が便利だったと述べています。イモは地中に育つのでどれだけ収穫できるか見えにくいけれど、穀物は地上で実り一目瞭然だったので、税を集める役人にとって収穫量を測量（査定）しやすかった。穀物の方がいっせいに実って、隠されず確実に徴税できて、しかも小さな粒なので重さや体積で正確に計ることもできた。税として集めた穀物を国家のために働いた軍隊や奴隷に分配するときも、好きな量で正確に配布できた。もちろん、穀物の方が貯蔵できて輸送できたことも、徴税する国家にとって都合が良かった、と。こうして、支配する側にとって富の蓄積と課税に便利だった、小麦、大麦、コメ、トウモロコシなど数種類の穀物を「主食」として、支配下の人民や奴隷に生産させて、軍隊を養って、国家が成長した、と。

穀物の役割については議論がつきませんが、とりあえず「主食」と呼ばれる食料ですら、自然や人の胃袋が選んだというより、昔から政治経済に組み込まれた「政治的作物」だったことに気づいてもらえたら嬉しいです。

A 、穀物は軽くて保存が利くから遠くまで輸送できたとはいうものの、輸送には費用と時間がかかった時代、しかも都市部の富裕層をのぞいて大多数の人たちが農村で自給自足的に生活していた時代に、庶民が日常食べる食料を遠くまで貿易することはありませんでした。

6 現在では、地球の裏側から輸入された食品を私たちが毎日でも口にすることができますが、シルクロードの時代に中央アジアからラクダの背に載せて数カ月（数年？）もかけて日本の農民が食べる穀物を運んできても、儲けにはなりませんよね。

シルクロードから運んできたのは、正倉院に納めるような、その地では得られない高価な宝物でした。B 、昔から遠距離交易はあったものの、費用と時間とリスクをかけてまで貿易された品とは、小さくて軽くて高価な物。お金にもなった金銀など貴金属や宝石、絹・綿・毛など織物や染料（かつてはファッションも貴重品でした）、C 王族や貴族が使う香料や、薬品にもなったコショウなど香辛料でした。

人類が農耕を始め、大河の流域に古代文明がおこり、都市国家が

栄えたり帝国(ていこく)が興亡(b)したりいろんな戦争が戦われたりしましたが、近代が始まるまで、世界の大多数の人たちは基本的には、身近な田畑や自然環境から日々の食を得ていました。

D、水蒸気で稼働(かどう)するエンジン（＝蒸気機関）が大型船やいろんな機械を動かすことができるようになり、近代が始まると、世の中が変わり、持てる者と持たざる者が分かれ、格差が広がっていきました。

（平賀緑『食べ物から学ぶ世界史』より
ただし一部改変があります）

問一 ――1「『神話』のように信じられてきたこの歴史観」とありますが、同じ意味で使われている言葉を文章中より二字でぬき出しなさい。

問二 ――2「後者」とありますが、ここでは具体的に何を指していますか。簡潔に説明しなさい。

問三 ――a、bの言葉の意味として最もふさわしいものを、それぞれの語群の中から選び、記号で答えなさい。

a、温床

ア、多様性が育まれる環境
イ、温かく居心地の良い場所
ウ、生まれ育ちやすい環境
エ、隠れて繁殖(はんしょく)する場所

b、興亡

ア、亡命すること
イ、なくなること
ウ、誕生(たんじょう)すること
エ、栄えてほろびること

問四　――3「なぜ、～占めるほどになったのでしょうか」とありますが、この問いの答えとして最もふさわしい箇所（かしょ）を「～から。」に続くかたちで文章中より二十二字でぬき出しなさい。

問五　――4「簡単です」とありますが、これと反対の意味で使われている言葉を文章中よりぬき出しなさい。

問六　――5「『反穀物の人類史』はさらに、～と述べています」とありますが、この本に述べられていることをふまえて、筆者が最も伝えたいことが書かれている一文をぬき出し、その最初の五字を答えなさい。

問七　[A]～[D]にあてはまるものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい（同じ記号を二回使ってはいけません）。

ア、では　　イ、さて　　ウ、やがて

エ、つまり　　オ、たとえば　　カ、もしくは

問八　――6「現在では、地球の裏側から輸入された食品を私たちが毎日でも口にすることができます」とありますが、現在の私たちが地球の裏側からも食品を手に入れているのに対し、近代以前の人びとは、どこから手に入れていましたか。文章中から十字でぬき出しなさい。

問九　次の［文章②］は、同じ著書の中で筆者が日本について書いている部分です。よく読んで、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

［文章②］

日本は江戸時代二〇〇年以上も鎖国[*1]政策によってかなり独立した経済社会を形成していました。実際にはオランダや中国、朝鮮半島など、世界とのつながりもあったのですが、貿易は厳しく制限されていました。そんな状況下で庶民の日常食が輸入されるはずもなく、日本はこの鎖国時代、食料に関しては基本的に（　Ⅰ　）と言えるでしょう。大多数の人びとは農村に住み、基本的に身の回りの田畑や山川、入会[*2]地などで採取・栽培した、慎ましいながらも（　Ⅱ　）を食べていたと思われます。日本の伝統的な食事はコメが主食だったと思われがちですが、江戸時代まで、コメは大多数を占めていた農民が日常の食として食べる食料ではありませんでした。近代に入り産業革命が始まると、人びとの働き方や食事が変わりました。

＊1　鎖国政策……江戸幕府が、中国・オランダ以外の外国人の渡来と、日本人の海外渡航を禁じた政策。

＊2　入会地……地域住民が共同で使う山野・漁場など。

(1)　（　Ⅰ　）・（　Ⅱ　）にあてはまる最もふさわしい言葉を、それぞれの語群の中から選び、記号で答えなさい。

（　Ⅰ　）

ア、狩猟採集にたよっていた

イ、自給自足できていた

ウ、中国から輸入していた

エ、シルクロードから運んでいた

（　Ⅱ　）

ア、コメや麦などの穀物

イ、イモ

ウ、野生の動植物

エ、多種多様なもの

(2)　波線部「コメは大多数を占めていた農民が日常の食として食べる食料ではありませんでした」とありますが、コメは農民の食料ではなく、何であったと考えられますか。［文章①］より漢字一字で答えなさい。

六　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

朋樹は進学塾に通う小学六年生。両親の離婚問題と受験のストレスで体調をくずし、塾に通えなくなり、心療内科を受診した。医師の助言で夏休みの間は受験勉強を中断し、環境を変えて過ごすことになり、祖父母の住む北海道富美別町に遊びに来ている。そして町の博物館にふらりと入ったことがきっかけで、そこに勤めるヨシエからのすすめもあり、戸川という前館長にアンモナイトの化石の探し方を教わることになる。

「まずは、ノジュールを探す」

「ノジュール[1]？」

「こういう丸っこい石だ」戸川は、さっき二つに割った石の片割れを拾い上げ、外側のなめらかな曲面をひと撫でした。「正しくは石灰質ノジュール。大きさは数センチから数十センチ。炭酸カルシウムが二次的に濃集して固結したもので、たいてい球状やレンズ状をしている。生物の死骸が分解されるとき、水中の炭酸カルシウムが死骸をおおうように沈殿して、ノジュールを形成することがある」

「えっと……つまり、中に化石が閉じ込められてるってことですか。カプセルみたいに」科学用語はともかく、イメージはなんとなくできる。

「無論、すべてのノジュールに何か入っているわけではない。ただ、ノジュールの中の化石は保存状態が良いことが多い」

「でも……」川原を見回して言う。「そういう丸っこい石ばっかですけど」

「外見だけで見分けるのは初心者には難しい。このあたりに露出[a]している岩石は、蝦夷層群中部の泥岩と砂岩だ。比較的やわらかいから、ハンマーで叩くと簡単に割れたり崩れたりする。それに比べて、ノジュールは緻密で硬い。だから、まずはノジュールを叩いたときの感触と音を知ることだ」

朋樹はさっきまでここに響いていた音を思い出した。要は、あんな風にキンキン鳴る石を探せばいいわけか。

戸川は足もとを示して続ける。「川原にもノジュールは転がっている。ただし、川原の石には上流から運ばれてきた火成岩や変成岩が混ざっているから注意が必要だ。そういう石も丸く磨かれてい

て、ノジュール同様に硬い。崖や斜面に埋まっている石、あるいはそのきわに落ちているものの中から探すほうが確率が高い」

戸川はそれだけ言うと、石の上にあぐらをかいた。さっきのアンモナイトを厚手のビニール袋に入れ、マジックで数字を書きつける。それが終わると、小さな緑色のノートを開き、何やら記録をつけ始めた。

え、もう終わり？　朋樹は戸惑った。仕方なく、「あのう……」と声をかける。[2]戸川は眉根を寄せてこちらを見上げ、無言のままボールペンの先で崖の方を指した。

（中略）

まずは、軽く叩いてみる。コン、と音がした。もう少し力を込めてみる。表面に傷はついたが、割れない。頭の上まで振りかぶり、勢いをつけて打ちつける。今度は割れた。というより、砕けたというほうが近い。小さなかけらをつまみ上げると、薄茶色の粉が軍手の指先についた。

「泥岩だな」戸川が言った。ノートにまだ何か書き込みながら、だ。「ノジュールではない」

「……だと思いましたけど」朋樹は平静を装いつつ、手をはたく。「音が違ったし」

「泥岩は、海底にたまった泥が固結したものだ」

「わかります、それは」塾で習った。堆積岩の一種だ。

数メートル移動し、別の石を拾い上げる。さっきと同じぐらいの大きさで、やや平たい。地面に置いて、ハンマーを振り下ろす。今度は、カン、という音がした。徐々に力を増しながら五回、六回と叩くと、真ん中で二つに割れた。ややざらついた断面があらわになる。

「砂岩だ」戸川があぐらのまま言った。「同じく堆積岩だが、泥岩より粒が粗いだろう」

「……ですね」

違うとわかってるなら、割る前に言えよ。[b]毒づきたくなるような気持ちとともに、石を投げ捨てる。

朋樹は半ば投げやりな気分で、丸みのある石を手当たり次第に叩き始めた。鈍い音がしたら、一打ですぐ次へいく。少し甲高いと感じたら、割れるまで叩いてみる。

三十分近くかけて、八個の石を割った。どれもノジュールでないということは、朋樹にもわかっていた。化石らしきものはもちろん見当たらない。

日差しの厳しさも暑さの質も、東京の八月とはだいぶ違う。それ

でも、休みなく動けば汗がゴーグルの中まで流れ込んでくる。ゴーグルを首まで下げ、Tシャツの袖で顔をぬぐっていると、そばで「どうだ」と戸川の声がした。いつの間にか、すぐ後ろに立っている。

「まあ。ハズレばっかですけど」[3]

「ハズレ、か」

戸川は自分のハンマーを握ると、崖に向き合った。打撃部分の反対側、くさびのようになったほうを、腰の高さに叩き込む。先端がめり込み、崖の表面がぼろっとはがれて落ちた。

「この高さに沿って、こんな風に削っていくんだ」

戸川から少し離れて立ち、同じようにハンマーのくさび側を打ち込んでみる。乾きかけた粘土のような感触。差し込むようにコンコンと叩くと、ブロック状に崩れた。戸川を真似て浅く掘り崩しながら、その領域を横方向に広げていく。

二人並んでしばらく続けていると、朋樹のハンマーの先が硬いものに当たった。と同時に、崖の表面が大きくはがれる。その奥に、丸みを帯びた石が現れた。

「ノジュールかもしれん。掘り出してみろ」戸川が横から言った。

朋樹は周囲の粘土をさらに削り、ハンマーをてこのように使って石を取り出した。手にずしりとくる。角はないが、朋樹が塾に持っていく弁当箱ほどの大きさだ。

地面に置き、軽く叩いてみる。キン、という音とともに、ハンマーが弾き返される。今までにない手応えだ。戸川を見上げると、うなずき返してきた。やはりノジュールなのだ。

がぜんやる気が出てきた。グリップを握り直し、力を込めて打ちつける。五回、六回、七回。石はびくともしない。ハンマーがはね返されるたびに、手がしびれる。

「痛っ」

石を押さえていた左手の人差し指を叩いてしまった。指の腹をはさんだだけだが、軍手をとってみると、大きな血マメができている。くそ。やり返すようなつもりで、さらに高くハンマーを振りかぶる。

何分間叩き続けただろうか。少しずつ深くなる表面の傷めがけて打ち込んでいると、急に響きが変わった。やったか。とどめとばかりの次の一撃で、ついに石は三つに割れた。

投げるようにハンマーを置き、一番大きな破片をつかむ。断面に目を凝らした。表面近くは白っぽく、中心部はグレー。光沢さえ感じさせる緻密な質感は、明らかに他の石とは違う。だが、それだけ。どの破片にも、化石のような異物は見えない。

「残念だったな」戸川がとなりにしゃがみ込み、[1]顔で言う。

「ハズレというのは、こういうことをいうんだ」[4]
「ケガまでしたのに……最悪」今頃になって人差し指が痛み出した。

（中略）

帰り道、また閉館間際の博物館に立ち寄った。
美しいアンモナイトが鎮座するガラスケースのわきを通り過ぎながら、[2]気持ちになる。あのあとノジュールは一つ見つけたが、化石は入っていなかった。
まっすぐ壁の前までいき、五枚ある解説パネルをもう一度端から見ていく。が、目当てのものはやはり見当たらない。
うしろで足音がしたかと思うと、「毎日熱心ねえ」と声をかけられた。帰り支度をしたヨシエが微笑んでいる。
「もしかして」ヨシエは朋樹のバックパックを見て言う。「今日も行ったの？　化石採り」
「はい。今日もダメでしたけど」
「あらら」ヨシエは眉根を寄せた。「ついてないねえ」
「戸川さんは、しょうがないって言ってました。[5]あの場所で化石がざくざく出るようなことはないって」
「やっぱりそうなんだ。そりゃここも閑古鳥が鳴くはずだわ」ヨシエは丸い肩をすくめて展示場を見渡す。「昔はね、この博物館にも少しはお客がいたのよ。全国各地から富美別まで化石採りにきた、マニアの人たちとかね」
「採れる量が減ったんですか？」
「まあ、ユーホロ川もずいぶん変わっちゃったからね」
「そのことについて書かれたパネルがあるって戸川さんに聞いて、[6]さっきから探してるんですけど……」
「ああ、あのパネル――」

（中略）

ヨシエは左手の壁に近づき、「これこれ」と言って隅に立てかけられたパネルを指差した。タイトルは〈富美別の化石産出地とユーホロダム〉
「ユーホロダム？」そんなものがあるとは知らなかった。
「見たことないかい？」ヨシエが言った。「町の南のほうに、ユーホロ湖ってあるでしょ。あれは、ユーホロ川をダムで堰き止めてできた湖なのよ。富美別ユーホロダムっていってね、三年前に完成したの」
「もしかして……」朋樹はパネルの内容に目を走らせながら言っ

た。

「そう。こんな風に、ダムのせいで化石の出る場所がのきなみ沈(しず)んでしまったわけ」

パネルに描(えが)かれた地図には、ダムによって水没(すいぼつ)する領域が水色で示されていた。星印がつけられた川沿いのおもだった化石産出地は、その三分の二ほどが水色で上塗(ぬ)りされている。

（伊与原新『アンモナイトの探し方』より
ただし一部改変があります）

問一　――1「ノジュール」とありますが、次の①～④の文はその「ノジュール」について説明したものです。空らん（　A　）～（　F　）にあてはまる言葉を答えなさい。ただし、A・C・D・Fについては文章中よりそれぞれ四字でぬき出し、B・Eについては二字の熟語を考えて答えなさい。

① 正式名称は「石灰質ノジュール」で、（　A　四字　）形をしている。

② 保存状態の良い化石が中に入っている（　B　二字　）性のある（　C　四字　）のようなもの。

③ 硬いので、（　D　四字　）で叩いても簡単に割れない。

④ 初心者が外見で（　E　二字　）するのは難しいが、叩いた時の（　F　四字　）という音が手がかりとなる。

問二　═══a～dの言葉の意味として最もふさわしいものを、それぞれの語群の中から選び、記号で答えなさい。

a、露出している

ア、あらわになっている　イ、転がっている

ウ、たくさんある　エ、しめっている

b、毒づきたくなる

ア、なぐりたくなる　イ、にくみたくなる

ウ、悪口を言いたくなる　エ、意地悪をしたくなる

c、鎮座する

ア、きれいに並んでいる

イ、乱雑に置いてある

ウ、どっかりと場所をとっている

エ、しっかりと固定されている

d、閑古鳥が鳴く

ア、苦情が出る　イ、はんじょうする

ウ、はやらない　エ、有名になる

問三　═══2「戸川は眉根を寄せてこちらを見上げ、無言のままボールペンの先で崖の方を指した」とありますが、このときの戸川の心情として最もふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、簡単ではあるが、わかりやすく説明したので、後は自由に思い切りアンモナイトを探してくるように、朋樹に優しくうながしている。

イ、朋樹がまだよく理解していないようなので、いっしょに探してあげたいが、戸川自身もいそがしいからそこまではできないということを察してほしいと思っている。

ウ、くわしく説明したのに、朋樹にはまだ理解できないのかとイライラして、早く離れて崖の方に行ってほしいと願っている。

エ、必要なことは全部説明したので、理解できてもできなくても、後は朋樹自身で探すしかない、と半ば突き放している。

問四　――3「まあ。ハズレばっかですけど」とありますが、この時の朋樹の心情を表している言葉を文章中より九字でぬき出しなさい。

問五　[1]、[2]にあてはまる最もふさわしい言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい（同じ記号を二回使ってはいけません）。

ア、悲しい　　イ、苦しい　　ウ、恨（うら）めしい
エ、涼（すず）しい　　オ、わくわくした　　カ、晴れ晴れした

問六　――4「ハズレというのは、こういうことをいうんだ」とありますが、「こういうこと」の内容の説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、血マメができるまで必死でハンマーを叩きつけてもノジュールが見つからないこと。
イ、丸みのある石を手当たり次第にハンマーで叩いて探してもノジュールが見つからないこと。
ウ、戸川のような専門知識のある人がノジュールを探したのに化石が入っていないこと。
エ、ノジュールを見つけて必死でハンマーで叩き割っても化石が入っていないこと。

問七　――5「あの場所で化石がざくざく出るようなことはない」とありますが、その理由を「～から。」に続くかたちで文章中より二十五字でぬき出しなさい。

問八　――6「そのことについて書かれたパネルがあるって戸川さんに聞いて、さっきから探してる」とありますが、この言葉から朋樹が戸川のことを信用していることがわかります。二人でいっしょにノジュールを探している場面から、朋樹と戸川の関係が最もよくわかる一文をぬき出し、最初の五字を答えなさい。

七

わかんねーよ、何もかも。
志望校のことも、塾に行けるかどうかも、自分の本当の気持ちさえ。
ここへ来てわかったのは、ただ一つ。
このまま化石になってたまるかってことだ。
時おり浮かぶそんな思いも、ハンマーを振り続けていると
すぐに消え去る。代わって頭を埋めつくすのは、いずれも目
の前に現れる、見事なアンモナイトの姿――。

これは前問の小説の後半部分です。主人公朋樹は、この後も夢中になってアンモナイトを探します。このように、あなたがこれまでに学校や塾の学習以外で夢中になったものは何ですか。また、それに夢中になったきっかけや、その面白さについて百五十字以内でまとめなさい（句読点や記号も一字と数えること）。